

**第50回神戸女学院大学英語英文学会
(KCSES) 大会報告
国際学部長 白井 由美子**

「毎日本当に暑いですね」という会話が続いた夏を経て、ようやく秋を感じられるようになった10月31日。50回目となる神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)が開催された。本学会は、英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の向上を目的として、大学院設置の際に設けられた英文学科ならではの学会である。

2024年4月、文学部英文学科は国際学部英語学科およびグローバル・スタディーズ学科として新たな船出を迎えた。そのような変化を経た今もなお、本学会の持つ意義をあらためて見つめ直し、これまでと同じ名称のもとで第50回大会が開催されたことは、誠に喜ばしいことである。毎年、卒業生や教職員の想いが込められてきたKCSESであるが、記念すべき第50回大会となる今回は、これまでにない分野の研究発表や講演が行われ、次の50年を見据えた意義ある大会となった。

構成は、前半が卒業生による研究発表、後半が特別講演である。今回は言語コミュニケーション分野が担当となり、関西学院大学手話言語研究センターの下谷奈津子先生を特別講師としてお招きした。『言語としての手話～ろう者を取り巻く社会と手話の可能性～』と題したご講演では、言語の二重分節性の特徴や、聴者とろう者の間に見られる言葉の解釈の違いに触れつつ、その間の交通整理を担う手話通訳者の立場についてお話し下さった。前半は、まず津田愛果氏による“The Intersection of Dramaturgy and Translation in Theatre: Exploring Performability and Singability”と題した研究発表が行われた。津田氏は現在、翻訳・通訳およびドラマターグとして、ニューヨークや東京などで上演される英語のミュージカルにも携

わっており、発表では、作品の意味や構造、背景を掘り下げて演劇を支えるドラマターグの役割が紹介された。続いて 氏の研究発表『TopPかHigh AppIPか?—心理動詞構文における主観性と構文的統合性の理論的再検討—』が行われ、英語の心理動詞を分析し、構文内部に注目する視点から感情の文法的構造を捉える方法が示された。

今回もオンライン開催ではあったが、質疑応答は活発で、発表者と聴衆が一体となり、意義深い時間を共有することができた。本学会の開催にご協力下さった会員の皆様、教職員、コミュニティーの皆様にも深く感謝申し上げますとともに、皆さまのさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

第 50 回
神戸女学院大学英語英文学会
2025. 10. 31 (金)
14:00- 16:30
オンライン開催

プログラム

I. 研究発表
The Intersection of Dramaturgy and Translation in Theatre:
Exploring Performability and Singability
津田 愛果 氏
(翻訳、通訳、ドラマターグ)

TopPかHigh AppIPか?
—心理動詞構文における主観性と構文的統合性の理論的再検討—
氏
(神戸女学院大学院博士課程)

II. 特別講義
言語としての手話
～ろう者を取り巻く社会と手話の可能性～
下谷 奈津子 氏
(関西学院大学 手話言語研究センター 助教)

神戸女学院大学国際学部・文学部英文学科

特別講演

言語としての手話 ～ろう者を取り巻く社会と手話の可能性～

下谷 奈津子

(関西学院大学手話言語研究センター)

手話は視覚・空間的モダリティを用いる自然言語であり、聴覚モダリティを用いる音声言語とは異なる独自の構造を有している。そして、手話を母語とするろう者は、その言語と文化をコミュニティ間で共有する言語的少数者である。1960年代、ウィリアム・ストーキーにより、手話が単なる身振りではなく、人間言語の特徴である「生産性」や「二重分節性」を備えた言語であることが示され、手型・動き・位置という音韻的要素が組み合わさることで語が形成されることが明らかになった。その後手話言語研究が進み、手話は手指表現に加え、目・眉・頬・口・頭・肩などの非手指表現 (NM) も言語的要素を持ち、文のタイプ (肯定文・Yes/No 疑問文・Wh 疑問文など) を区別したり、副詞的意味を付加したりするなど、音声言語にはない特徴を持っていることが分かっている。さらに手指表現とNMを同時に表現することが可能であるため、「同時性」という特性を備えているということも、「線状性」を特徴とする音声言語とは大きく異なる。

ろう者は「聞こえないこと」を障害ではなくアイデンティティとして捉え、手話を母語とするコミュニティ (ろうコミュニティ) を形成している。しかし、見た目や聴者と同じであるため文化的差異が理解されにくく、誤解やコミュニケーションの齟齬が生じやすいという現状がある。日本語が、非言語情報や察し合いを重視する高コンテクスト文化であるのに対し、日本手話は、気持ちや意図をすべて言語化する低コンテクスト文化である。この違いは、日常会話や職場でのやり取りにおいて誤解を生み、ろう者の生きづらさにつながっていると言える。こうした文化的背景を理解することは、円滑なコミュニケーションのために不可欠である。

双方の言語 (日本語と日本手話) や文化 (聴文化とろう文化) を繋ぐ仲介者として、手話通訳者の存在がある。手話通訳は、単なる言語の仲介ではなく、文化的・社会的背景を理解しながら、ろう者と聴者の間に立つ重要な役割を担う専門職である。通訳には「聞き取り通訳」(日本語→日本手話)

と「読み取り通訳」(日本手話→日本語) があるが、通訳を利用するのはろう者のみだと思われるがちである。しかし、読み取り通訳は、手話を知らない聴者のためのものであり、聴者も手話通訳利用者であることを強調しておきたい。また、最近の動向としては、2021年に公共インフラとして「電話リレーサービス」制度が始まり、365日24時間手話通訳が利用できるようになった。

音声言語の通訳倫理には「中立性」が重要視されている。一方で、手話通訳の場合、双方の「中立性」を保つのは、現実には難しい場合がある。ろう者の権利保障が不十分な状況にあること、「ろう者＝社会的弱者 (障害者)」という見方がまだまだ根強い状況にあることなどの理由から、形式的な中立を守ることは、権力構造に無自覚に加担する危険性を孕んでいる。このため、日本手話通訳士協会の倫理綱領には「中立性を保つ」ことは明言されていない。また、「人権尊重」や「社会参加の促進」が強調されている。

最後に、筆者自身が取り組んでいる「手話の第二言語習得」に関する研究について紹介する。日本では1990年代以降、手話教育を第二言語教育として位置づける試みが進み、大学で日本手話を言語科目として開講する事例も増えている。しかし、聴者が第二言語として手話を学ぶ場合、音声言語とは異なるモダリティ (視覚・身体動作) を扱うため、音声言語を第二言語として習得するときとはまた違った特有の習得過程が見られる。これらの習得には、単なる語彙の暗記ではなく、手話特有の文法や語用論的な理解が不可欠である。筆者の研究では、大学で日本手話を履修している学生15名を対象に、日本手話の音韻習得パターンを分析した。その結果、音韻要素である手型・位置・動きのうち、動きの習得が最も難しく、様々な表出エラーが観察された。例えば、体の中心により近い関節を動かさず、軌跡運動 (腕などの比較的大きな動き) と内部運動 (指など比較的小さな動き) の両方を伴う単語では、内部運動が欠落する、1つの単語内で手型が変化する際にいずれかの手型が欠落する、などの傾向が確認された。これは、同時に複数の音韻情報を認知する必要性や、音声言語とは全く異なる調音器官 (手、指、顔など) の使用に起因すると考えられる。こうした知見は、手話教育の教授法や教材開発において重要な示唆を与えると考えられる。

手話は「ジェスチャー」でもなく「日本語の語順

通りに手を動かして表現するもの」でもない。ろう者が日常的に用いる「目で見ることば(視覚言語)」である。本講演を通じて、手話という言語の多様性と奥深さ、そしてろう者を取り巻く社会について理解を深めていただき、手話をめぐる言語観やマイノリティ理解のあり方について考える契機となれば幸いである。今後、手話やろう者に対する正しい理解や、通訳などの制度整備を進めることで、ろう者と聴者が対等に生きることができる社会の実現が期待される。

発表要旨①

The Intersection of Dramaturgy and Translation in Theatre: Exploring Performability and Singability

Aika Tsuda

(翻訳、通訳、ドラマターグ)

This presentation describes the similarity between dramaturgy and translation and emphasizes the importance of having a dramaturg involved in the process of musical theatre translation. While the responsibilities of dramaturgs may vary, some common tasks include researching the play and providing historical and cultural context to the creative team, cast, and audiences to ensure accuracy and authenticity. They also support the creative process by serving as the “first audience” in rehearsal space, offering objective insights and feedback. Dramaturgs and translators often address similar questions: When was the play written? What is the cultural and historical background? Who are the target audiences? Why is the play relevant now? What is the purpose of translating or producing this piece? Due to these shared inquiries, dramaturgical skills are both necessary and beneficial to deepen musical theatre translation.

There are four main reasons why dramaturgical skills are helpful in musical theatre translation: to ensure performability and singability; to respect history and culture and not to offend anyone; to deepen the world of the story; and to maintain an objective perspective.

Even though it exists as written text, ensuring performability and singability is essential in theatre translation, as the translated text is ultimately delivered to the audience through performance. Since the final product is a live performance, achieving performability and singability requires careful analysis and intentional choices.

Respecting history and culture is an increasingly important reason for involving dramaturgs. Every theatrical work includes some cultural and historical context which makes dramaturgical insight essential. This is especially true for translated works, where creators and audiences may be less familiar with the background of its culture and history than the creators and audiences at the original production. Therefore, translated plays require more careful research to ensure accurate interpretation and cultural sensitivity.

In addition, dramaturgs also help deepen the story in multiple ways. Even when certain elements are not explicitly stated in the script, their research and analysis can offer valuable insights for actors, designers, and directors, allowing them to add meaningful layers to the production. This will enhance emotional impact and audience immersion.

Finally, dramaturgs contribute objectivity to the creative process. While actors, designers, and directors focus on their specialty, dramaturgs maintain a broader perspective. Their ability to step back and view the production holistically helps ensure that the intended message is effectively communicated to the audience.

発表要旨②

TopPかHigh ApplPか？ —心理動詞構文における主観性と 構文的統合性の理論的再検討—

(神戸女学院大学大学院博士課程)

1. 研究目的

本研究は、日本語および英語の心理動詞構文において、Experiencer (経験者) がどのように構文的に統合されるかを理論的に検討するものである。従来、Belletti&Rizzi (1988) は心理動詞をTopP (談話構造的投射) で分析し、Pesetsky (1987) はHigh ApplP (構文的投射) を想定した。本研究は、この二つの立場を比較検討し、心理動詞構文における主観性 (subjectivity) と構文的統合性 (syntactic integration) の関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

理論的枠組みとしてMinimalist Program (Chomsky 1995, 2000, 2001) を採用し、

- ① Merge・Agree・Phase理論に基づく構文派生の分析、
- ② コーパス (BCCWJ・COCA) における心理動詞構文の頻度・分布分析、
- ③ Typological Comparison (英語・日本語・フランス語・バスク語)

の三点から検証を行った。特に、日英比較ではga-o型とni-totte-ga型の構文的差異を中心に、Experiencerの統合度合いを定量的に評価した。

3. 主な結果

- 構文的統合性の差 : ga-o型ではExperiencerがvP内に統合され、Agree操作を受ける。一方、ni-totte-ga型ではPPとしてTopP領域に現れ、統語的ではなく談話的要素として機能する。
- 頻度分布の差 : BCCWJの結果から、ga-o型は圧倒的に高頻度で出現し、ni-totte-ga型は評価的・抽象的文脈に限定される。これは構文的統合性と意味的抽象度の相関を示唆する。
- 類型論的示唆 : 英語 (fear-type) と日本語 (kowagaru-type) はHigh ApplP構造を共有し、フランス語 (inquiéter-type) やバスク語 (gustatu-type) はTopP的特性を持つ。

4. 理論的意義

本研究は、心理動詞構文におけるTopPとHigh ApplPの分布を理論・コーパス両面から統合的に捉える初の試みであり、

- 主観性の階層化 (syntax-semantics interface)
- 構文的統合度と談話的可視性の逆相関
- 多言語的に普遍的なHigh Applicative構造の存在を示唆するものである。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

*保坂 華子 氏

“The Phonetic/Phonological Learning Effects of Teams’ Reading Progress’ for English Language Learners Listening to Their Own Speech”

東京、オンラインでハイブリッド開催されたThe Asian Conference on Education 2025 (ACE2025) (11/23-28) にて研究発表。

*南出 和余 氏

“Drawing the Sense of Nationalism on Deyal Likhon: Who is Generation Z in Bangladesh?”
ドイツ、Heidelberg Heidelbergで開催されたThe 28th European Conference on South Asian Studies (10/1-4) にて研究発表。

*鶴野 ひろ子 氏

“Emily Dickinson and Tropical Flowers”
台湾 (台北)、National Chengchi University (NCCU) で開催されたEmily Dickinson International Society+Wenshan Conference (6/19-22)、Plenary Speakersの一人としてOnlineで研究発表。

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇Susan E. JONES 氏

『いちにのさん!』
(翻訳作品出版、スギヤマ カナヨ 作・絵、童心社、2025年7月刊)

◇瀬戸 智子 氏

『女子プロレスの誕生—冷戦期日本の大衆文化とインターセクショナリティ』
(単著出版、春風社、2025年2月刊)

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も9名の応募を受けつけた。2月に言語コミュニケーション、応用言語学(通訳・翻訳分野)、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

英米文学文化(応募者0名)

言語コミュニケーション(応募者6名)

<最優秀賞>

E22055 西田 実姫

<優秀賞>

E22066 坂田 晴

E22076 竹内 柚葉

応用言語学(通訳・翻訳分野)(応募者2名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E22027 喜多川 七菜子

グローバル・スタディーズ(応募者1名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E22051 長井 楓華

記念賞

2025年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカット 記念賞 E3年生 田邊 葵生子

デフォレスト 記念賞 E3年生 大迫 明璃

キャンパスニュース

<着任>

Trane DeVore 准教授 2026年4月

岸上 伸啓 客員教授 2026年4月

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

(2010年 3月 2日改訂)

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英語英文学会大会を開催する。

Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。

(5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、本学英文学科長と、本学英文学科教員若干名で構成されるものとする。

(c) 会費の取り扱いは学科会計委員が担当する。

附 則

この規定は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)

内規

I. 大会での発表について

(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、英文学科教授会で審議の上、決定する。

II. 参加費・経費について

(1) 神戸女学院在職者、在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。遠隔による開催の場合はこの限りではない。

(2) 郵送費などの経費は、英文学科予算から支出する。

(3) 参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員と文学部事務室(英文学科)が担当する。

附 則

この内規は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)



編集後記

今年度もKCSES会員の皆様から、研究活動報告・出版物のご連絡をいただき感謝申し上げます。今年度の学会もオンラインでの開催となりましたが、たくさんの学会員の方々に参加していただき、手話の構造、文化歴史について学ぶだけではなく、手話としての言語学について深く考えることができ、手話の第二言語習得や手話通訳についての知識も深めることができました。

なお厚かましいお願いで誠に恐縮ではございますが、神戸女学院教育振興会にご寄付いただきます際には学生たちの研究活動の補助に用いさせていただきます。「国際学部 of 学生のために」と一言お書き添えいただけましたら幸いです。

皆様のご健康と益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

KCSES Newsletter 編集委員

(2025年度運営委員)

(ABC順)

○松尾 歩

○白井 由美子

○和氣 節子

○米川 正子

KCSES Newsletter No. 41

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

2026年3月発行